

知的障害児の養育者の養育ストレス —ストレスの有無とその関連要因についての検討—

○ 佐賀大学 氏名 橋本 芳 (6334)

小松原 修 (県立大和特別支援学校・8142)

キーワード：養育ストレス、因子分析、特別支援学校

1. 研究目的

障害児を養育する親は、子に障害があることで養育ストレスを抱える場合が多い(芳賀・久保, 2008)。また、その養育ストレスは健常児の場合よりも強く感じる場合が多いことが明らかにされている(北川ほか, 1995)。本研究は、特別支援学校に子どもが通学している保護者の養育ストレスとそれへの関連要因を明らかにすることを目的としている。

2. 研究の視点および方法

(1) 研究の視点

障害児の養育ストレスの有無とそれらへの関連要因について、量的調査の統計解析によって明らかにすること

(2) 研究の方法

①調査主題：障害児の養育ストレスの有無とその関連要因

②調査期間：平成23年4月

③調査対象：A県B特別支援学校の小学部、中学部、高等部に生徒が通学する保護者(配布数200票、回収数102票、回収率51.0%)。

④調査方法：B特別支援学校の協力を得て、全保護者に調査票を配布し、郵送によってB特別支援学校を通じて回収した。

⑤調査内容：1)回答者属性：年齢、性別、職業

2)家族の属性：同居家族、特別支援学校に通う子の学年

3)子の養育について：子の養育ストレスの有無、子の特徴

⑥分析方法：回収した調査票102票をもとに、SPSS ver. 18.0を用いて分析を行った。

回答の各項目は単純集計で結果を捉えた。また、「養育ストレス」への関連要因を捉えるために、探索的因子分析を行った。統計的有意水準は5%とした。

3. 倫理的配慮

B特別支援学校の責任者に事前に本研究の趣旨や調査内容を伝え、了解を得た上で調査を実施した。各保護者へは、B特別支援学校を通じて調査票を配布し、回答は無記名とし匿名性を維持した。

4. 研究結果

「回答者の年齢」は比率が高い順に「40歳代」が57.8%、「30歳代」が22.5%、「50歳代」が18.6%、「60歳代」が1.0%であった。「子の学年」は、「高校2年」が17.6%、「高校3年」が14.7%、「高校1年」が13.7%、「中学校2年」が11.8%、「中学校1年」が10.8%、「小学校1年」が7.8%、「小学校4年」が6.9%、「小学校5年」が5.9%、「小学校6年」が3.9%、「小学校2年」が3.9%、「中学校3年」が2.0%、「小学校3年」が1.0%であった。

「子と関わる時間」は①平日：平均5時間（SD±3.64）、②休日：平均11.30時間（SD±6.15）であった。「子の将来に対する気がかり」は、「気がかりなことがある」が99.0%でほぼすべての回答者が何らかの気がかりを抱えていた。「子の養育ストレスの有無」は「ある」が79.4%、「ない」が16.7%であった。

「養育ストレスの関連要因」を捉えるために、探索的因子分析（最尤法、プロマックスか移転）を行った結果、固有値1以上の4因子が抽出された。第I因子は理解力や判断力に関する項目に高い負荷量を示したため、これを「理解・判断困難」と名付けた。第II因子は対人関係への困難に高い負荷量を示したため、これを「対人関係困難」と名付けた。第III因子は集中力や運動への困難に関する項目に高い負荷量を示したため、「集中・運動困難」と名付けた。第IV因子はコミュニケーションの困難に関する項目に高い負荷量を示したため、「コミュニケーション困難」と名付けた。

因子分析により検出された4因子の内的一貫性について Cronbach の α 係数を算出した結果、項目全てに関しては $\alpha=0.932$ であり、非常に高い信頼性を示していた。また、「第I因子： $\alpha=0.872$ 」、「第II因子： $\alpha=0.870$ 」、「第III因子： $\alpha=0.849$ 」、「第IV因子： $\alpha=0.785$ 」であった。このことから、全体としても各因子別にみても高い内的整合性があると判断された。なお、これら4因子の累積寄与率は65.184であった。

4つの因子ごとに因子得点を算出して、「養育ストレス」が「ある」人と「ない」人で各因子得点の平均値を比較した結果、両者間で「第III因子：集中・運動困難」、「第IV因子：コミュニケーション困難」に有意差がみられた（ $p<.05$ ）。「第I因子：理解・判断困難」、「第II因子：対人関係困難」には差がみられなかった。

5. 考察

因子分析の結果、「理解・判断困難」、「対人関係困難」、「集中・運動困難」、「コミュニケーション困難」の4因子が抽出された。これら4因子の因子得点は、いずれも「ストレスがない」人より「ストレスがある」人で高かった。このことから、これら抽出された4つの要素が養育ストレスに影響していると考えられる。特に「養育ストレス」には「集中・運動困難」と「コミュニケーション困難」が有意に関連していた。このことから、養育者の養育ストレスにとって、子の物事に対する集中の困難、運動の困難、コミュニケーションの困難さがストレスの要因になっていると考えられた。